

Title	Yves-Guyot逝く
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.6 (1928. 6) ,p.778(62)- 793(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19280601-0062
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280601-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Yves-Guyot 逝へ

永 田 清

左の一篇は、増井、加田兩教授の懇切叮嚀なる御示教を仰いで成つたものである。文字通り秃筆を呵して本稿を草したるは、一に Guyot を弔はんを欲する筆者の微意に他ならぬ。

I Guyot の生涯

二 經濟政策家としての Guyot

三 理論經濟學者としての Guyot

四 結論

I Guyot の生涯

二月二十二日の佛紙 *Le Temps* は突如として自由主義の闘士 Yves-Guyot の長逝を報じて居る。Guyot は一八四三年九月六日を以て小古都 Dinan (Côtes-du-Nord) に生れ、教育は主として Rennes に於てうけた。彼の祖父 Yves-Julien-Guyot は教養あり學識ある Rennes の法律家にして、且十八世紀佛蘭西大革命運動の熱心なる研究者であつた。彼は Rennes に於て稀に見る藏書家であり、Voltaire, Jean-Jacques Rousseau, Montesquieu, Diderot, d'Alembert, Buffon, Helvétius, d'Holbach, La Mettrie, Mably, Condillac, d'Argens, Maupertuis, 父 Mirabeau, Quesnay, Galiani, Raynal, Adam Smith, Lavoisier, Jean-Baptiste Say 等一流學者の著書のふならず、其の他實際技術の著書も多數藏して居た。彼は孫 Yves-Guyot の生れるに先立ち一八四〇年に死したるを以て、直接其の教育に與るところはなかつたが、彼の此の豊富なる藏書は、Yves-Guyot の薰陶に與つて力を致す事となつたのである。

幼時より果敢であつた Yves-Guyot は、十三才の時、水兵たらんと希望した。幸にして家庭よりの反對はなかつたが、トラファルガーの海戦以後平和に歸したる歐洲の海は、海上に勇名を馳せんとする幼き勇士の意氣を挫いた。彼は此果かなき夢想を捨てて、實際經濟學の研究に向ひ、金融問題研究の爲に英國へ渡らんとしたが、今度は父の反對に遭つたのである。此若き學徒は再び祖父の文庫に依り、自然科學、歴史、政治、法律を學び、猶ほ、他く事なき彼の知識慾は、彼を驅つて Marie Ronault の下に博物學、特に地質學を研究せしめた。此の知識が、やがて古生物學、人類學の研究に於て役立つたのである。此の頃又同郷人 Dupuy の影響をうけて、力學殊に航空學に甚しく興味を惹かれて居た。

一八六四年遂に自己の天職を識り、著述家として立つ爲に巴里に向つて出發した。父は激勵の辭を與へて曰く、「行け、而して眞のブルターニュ人の意氣を以て己の欲するところ、爲さんとするところを敢行せよ」と。年齢二十一の時である。

巴里に出づるや、Nadar の航空協會に入り、又 Conférence La Bruyère & Conférence Mole など云ふが如き若き操觚者の會合に出入した。此の間、*L'Inventeur* 及び *Diderot* 論を書いたが、前者のみ、

一八六六年の未出版の運びとなつた。此が彼の處女出版である。此の著作は成功を治めたと云ふべきであらう。何故ならば、是に由つて知名の士に認めらるゝところとなつたからである。一八六八年共和主義運動起るや、ニームに於ける共和黨系の新聞 *L'Indépendant du Midi* の編輯長となり、共和黨の結成に努力した。熱情的なる彼の行爲は、遂に治安法に觸れて、一ヶ月の禁錮に處せられた。再び巴里に歸へりて *Rappel* 新聞の政治記事編輯に當り、極左の共和黨委員會に投じた。而も普佛戦争起るや勇敢なる一兵士として戦線に立ち祖國の爲にマルセイユを絶叫したのである。巴里コミューンの間 *Union nationale des Chambres syndicales du commerce et de l'industrie* の *La Ligue républicaine des droits de Paris* の融合を謀つた。此が徒勞に歸した爲、共和黨 *Le Radical* に入り、輿論の喚起に力むる事となつた。即ち *Nos Préjugés politiques* を七二年と、*Les Lieux communs* を七三年に出版し、又同年に *Histoire des Proletaires* 及び *Etudes sur les Doctrines sociales du christianisme* を著して居る。後者は A. Bebel が *Hubertshurg* の要塞に入獄中、獨譯するところとなつたのである。大工業家 Menier を相識する様になつたのも此年である。翌七四年 *Saint-Avoye* 區より選出せられて市會議員となり、其の間警視廳の不正事件を摘發して六ヶ月の禁錮（七七年四月二十七日より十月二十七日迄 *Sainte-Pélagie* に入獄）及び三千フランの科料に處せられた。此の後暫く操觚に従つて居たが、八五年愈、ノートル・ダム區より選出せられて代議士となり、自由貿易運動に活躍した。遂に八九年二月二十二日、持つて生れた政治的手腕と雄辯とに由り、工部大臣 (Firard-Frechinet 内閣一八八九年二月より九二年二月迄) に榮達した。九三年の改選に當り、再び第

一區より立候補したけれども、彼の極端なる反社會主義は、彼に落選の憂目を與へた。此時以來、學問的研究に専心し、益、自由主義學説を擴充しつつ、社會經濟學者として絶へず雄勁なる筆を振ふ事となつた。一九〇九年恩師 G. de Molinari の後を襲ひ *Journal des Economistes* の主筆となり、死に至る迄殆んど毎號同誌に執筆する外 *L'Agence économique et financière* 及び *Siècle* 誌に絶えず論説を發表した。歐洲大戦起るや *Les Causes et les Conséquences de la guerre* (1915) を著して平和運動に盡した。該書は彼の著作中、金融問題の諸研究と共に、主要著作中に屬するものであるが、學説的に見れば *La Science économique* (第一版一八八一年) を以て、其の代表作と目すべきであらう。此の *La Science économique* の最新第六版が彼の長逝せし其の日に發行されたるは又奇しき縁と言ふべきである。

斯くして、Guyot は「思想の絶對的獨立と無用なる國家干渉の憎惡とを行動の規範として」(Colson の追悼演説 *Journal des Economistes*, Mars 1928, p. 326) 八十五の永き生涯をこゝに終へたのである。

彼の主要著作目録

L'Inventeur	1866
Nos Préjugés politiques	1872
Les Lieux communs	1873
Histoire des Proletaires	1873
Etudes sur les Doctrines sociales du christianisme	1873

Le Travail et les Traités de commerce	1879
La Science économique et ses lois inductives	1881
La Prostitution	1882
La Famille-Pichot (六編)	1883
La Morale	1883
L'organisation municipale de Paris et Londres	1883
La Police	1884
Un For (六編)	1884
Études de Physiologie sociale	1882-1885
Un drôle (六編)	1885
Lettres sur la Politique coloniale	1887
L'impôt sur le revenu	1887
La tyrannie socialiste	1893
Les Principes de 1789 et le socialisme	1894
La Propriété, origine et évolution, thèse communiste	1895
La Morale de la concurrence	1895
Quesnay et la physiocratie	1896
Trois ans Ministère des Travaux publics	1897
La Comédie Socialiste	1897
L'Économie de l'Effort	1897

L'évolution politique et sociale de l'Espagne	1899
Dictionnaire du commerce, de l'industrie et de la banque (Raffalovich et Guyot)	1898-1901
Les Conflits du Travail et leur solution	1903
La Comédie Protectionniste	1905
Sophismes Socialistes et Faits Économiques	1907
La démocratie individualiste	1907
Les Chemins de fer et la grève	1911
La gestion par l'État et les municipalités	1913
Les Causes et les Conséquences de la guerre	1915

II 經濟政策家としての Guyot

其生涯を以て知らるゝ如く、彼の思想の根柢を貫いて渝らざりしものは、極端なる個人主義である。彼は Physiocrates, A. Smith, J. B. Say, H. Spencer, MacCulloch 等の自由思想を繼承し且擴充した。彼に従へば「個人的利益は文明向上の主要原動力である」。(註一) 故に「自利心は個人に於ける行動の規範である」。(註二) 従つて「進歩は人が人に及す強制的行動に反比例し、人が物に及す行動に正比例する」と言ふのである。(註三) 斯る個人主義的自由主義の理論構成に直接影響せしものは 恩師 G. de Molinari の其れであつた。

Molinari に従へば、國家は、唯だ個人の經濟的活動の自由に行はれるが如き環境を確保すれば足

りる。何故に然るか。彼の經濟的機構の概念が其の論據となるのである。即ち彼は斯う考へる。競争並に價値に於ける自然法則の作用は、自働的に生産と欲望との調和を確保する。一切の貧窮と困惑との原因は、資本と勞働との關係に於て「自由なる環境」が完全に實現せざるに在ると言ふ。斯る樂觀論的幻想は遂に Molinari を驅つて極端なる個人主義者たらしめ、國家職能の範圍を殆んど皆無ならしめたのである。彼に従へば、生産物並に勤勞は二つの範疇に分たれる。(一)個人に必要な生産物並に勤勞(其の消費が個人的なるもの)と、(二)社會に必要な生産物並に勤勞(其の消費が集合的なるもの)とである。(一)の個人的消費に於ける勤勞は根本的に私的企業に放任さるべきである。(二)の集合的消費に於ける勤勞に關しては、國家の干渉を認容する。然かも彼は特に、その作用の範圍を制限すべき幾多の方法を求めて居る。即ち最も重要な國家の職能は對外的安全の確保であり、従つて其の職能は私的且競争的經濟法則の作用に従屬すべきものなりと考へる。(註四) Guyot に從へば「Molinari は十九世紀に於ける知的記念物たるべき勞作を遺した」と。斯くの如く Guyot の斷定は聊か極端に失して居る様である。(註五) 即ち、生來極端なる獨斷論者であり、且感情的なる闘士であつた Guyot は、(註六) 其の師の個人主義に熱烈苛酷なる感情を與へたのである。(註七) 斯くて彼は社會主義に對する最も熱情的なる不俱戴天の敵となつた。其の反社會主義論は主として「Tyrannie Socialiste; Les Principes de 1789 et le Socialisme; La Comédie Socialiste; Les Conflits du Travail et leur Solution; Sophismes Socialistes et Faits Economiques; Le Collectivisme Futur et le Socialisme Présent (Journal des Economistes, 1906年七月); La Banqueroute du Socialisme Scientifique (1907年二月)に窺ふ事が出来る。

彼は社會主義に對すると等しく、保護主義並に保護關稅論に對して戰つた。(註八) 其の武器は「競争の倫理」て彼の命題である。「競争の倫理」とは如何。彼は言ふ。「道德の原動力は何處に在りや。或は言はん、宗教。然らば如何なる宗教が人類の罪惡を根絶したるや。又言はん、形而上學。然かも如何なる哲學者と雖も、是に値しないのである。余は、空虚なる言説を以て、道德の原動力を主觀的概念に捏造し得るとは信じない。余の所信を以てすれば、道德の原動力は殆んど一世紀半以來既に近代文明中に生じ來つて居るのである。自由主義の概念は、個人に對しては精力と活動とを、人類全體に關しては、親切と信頼と相互扶助とを増加せしめる。該主義は最も高き道德行爲を鼓吹する。經濟的競争は、生産及び交換を基礎とする文明に於ける、道德の最大なる原動力である」(註九) 洵に、彼に従へば、自由競争は經濟的進歩の原動力たるのみならず、道德的進歩の原動力でもある。絶對的自由競争制度のもとに於て行はれる自利の法則は「競争の倫理」なる範疇に従つて、人と人との關係に於ける正義、不正義の統制を最もよく啓示するのである。(註一〇)

斯くの如き彼の極端なる樂觀的自由放任説は、又、自由競争に代ふるに社會連帶を説く Solidariste の反對をうけた。特に Gide は多分の皮肉を交へて揶揄して居る。曰く「Guyot の説く新道德は、一切の商行爲を目して「Service-rendu」を以てす」(註一一)

私は、彼の極端なる個人主義がその師 Molinari に負ふ所以を前述した。然も兩者は、猶ほ次の二點に於て根本的相違を示して居るのである。

(一) 個人主義と民主主義との關係

Molnar が民主主義を排したるに反し、Guyot の個人主義は甚だ民主的である。彼は佛蘭西革命を讚美する。佛蘭西革命の精神は人類進化に於ける社會上政治上の基礎を構成する。然るに彼の著 *Les principes de 1789 et le socialisme* 及び *La démocratie individualiste* に由れば、民主主義と社會主義とは相對立するものである。佛蘭西革命は、個人の自由と平等とを宣言し、私有財産と比例稅法とを確立した。然るに社會主義は、契約の自由を奪ひ、階級を再建し、財産の國有化を唱へ、累進稅法を説くのである。故に、眞の民主主義者は、社會主義者に非ずして、個人主義者たらざる可らずと言ふのが彼の結論である。(註一二)

(二) 個人主義と道德との關係

Molnar は近代に於ける社會的恐慌の原因を總て經濟的領域内に見出して居ない。彼は其の原因を「集合的統治」の欠陥ある作用、並に「個人的統治」の過誤即ち各人に於ける道德性の減少に在りとした。故に、彼の政策論は、國家職能の制限と、「自由なる環境」への復歸とを唱へるのみならず、一般道德觀念の困憊を救はんとするのである。

然るに Guyot は、斯くの如き精神上、宗教上の問題を論じない。定命論者であり、實證主義者である彼は、形而上學的、宗教的なる一切の信念から完全に蟬脱して居る。彼は、新道德の基礎、個人主義學說の完成を、經濟其のものより抽出せんとした。其の論構は即ち「競争の倫理」である。彼に従へば、近代社會には、大多數の人類を他愛に導くところの道德的原動力がある。分勞並に交換制度のもとに於て、各人は、自己の爲のみならず、他人の爲にも生産するのである。斯くの如く實證的にして、經濟生活の結果たる道德は、形而上學的、宗教的道德よりも優位に在る。唯、經濟が道德の基礎たる爲には、自由放任を必要とする。生産並に交換に於ける自然法則の自由なる作用に放任しなければならぬ。國家の干渉は、却つて「利他主義をして強烈なる利己主義たらしめる」と言ふのである。(註一三)

註

- I Yves Guyot, *La Science économique*. Liv. XI, III, p. 475
- II Yves Guyot, op. cit. p. 475
- III Yves Guyot, op. cit. Liv. XI, p. 475
- IV Gaëtan Piron, *Les Doctrines économiques en France*. p. 104-110
- V Gaëtan Piron, op. cit. p. 104
- VI Raymond de Waha, *Die Nationalökonomie in Frankreich*. S. 98
- VII Gaëtan Piron, op. cit. p. 110
- VIII Yves Guyot, *La Comédie Protectioniste*. 1905 參三
- IX Yves Guyot, *La Moral de la concurrence*. publiée dans la nouvelle revue. 一八九六年一月一日
- X J. Ramland, *Histoires des Doctrines économiques*. p. 470
- XI Ch. Gide, *La Coopération conférences de propagande*. p. 248-249
- XII Gaëtan Piron, op. cit. p. 111-112
- XIII Gaëtan Piron, op. cit. p. 112-115

三 理論經濟學者としての Guyot

個人主義に基く彼の政策論が、先人に負ふところ極めて多きに反し、彼の *La Science économique* には、其の獨創性が窺れる。(註一) 彼は極端なる實證主義者である。彼の思想は自然科学的、數學的、である。Raymond de Waha は言つて居る。然し此の數學的と言ふ意味は、決してクールノーやワルラスの用ひたるが如き近代的意義に於ける函數理論の意味ではない。唯だ經濟理論を表明するに、常に統計的材料に由つて之を實證したるに過ぎない。然かも彼の特徴は範式を好むに在る。曰く「人は行爲の動機を單純化さんとし、常に或る種の範式に従つて其の意思を決定する。故に研究者の目的は、虚偽なる範式に代ふるに正確なる範式を以てするに在る」と。(註二) 彼に従へば「一切の科學は歸納に由つて構成される」。「歸納は事象の證明であり、演繹は明確なりと思惟されたる概括的法則の歸結である」(註三) と言ふ。故に彼の目的とするところは、經濟現象の恒常的且一般的なる關係を顯示するところの歸納法則を確立するに在る。(註四)

前述の如く、彼は、經濟現象の此の複雑なる因果關係を研究するに當り、極めて徹底せる樂天觀を基礎とした。彼の經濟學は Physiocrates, Smith, Ricardo, 等と均しく *Homo economicus* を前提とする。然るが故に、古典學派に對して試みたる L. Briano の反經濟人論に反對する。曰く「經濟人の抽象は科學的方法に屬する。若しも、經濟的行爲に於て、同情若しくは憎惡と云ふが如き感情に依つて導かれるならば、その行爲は、既に經濟的行爲たり得ないのである。然るに、經濟學は經濟的考慮に由つて生ずる經濟的行爲のみを其の研究對象とする」(註五) 故に經濟學に於ける經濟人の前提は、方法論的に見て、當然であると考へる。

而して、Guyot の自ら誇る論點は、價值の定義並に使用價值と交換價值との間に於ける矛盾の解決に在る。(註六) 彼は、奧太利學派の限界效用説を排して、事實に適合せざる主觀論なりと爲したる後、從來の價值説を次の五つに分類する。

- 一、效用と價值との混同——其の爲に、交換價值及び使用價值と云ふが如く價值なる語に種々なる補語を必要として居る。(Adam Smith)
- 二、價值は勞働より生ずと爲す説(Ricardo, Rodbertus, Marx)
- 三、價值を以て、效用それ自體として考察されたる事物と爲す説(Turgot, Condillac, Rossi, Molinari)
- 四、價值は、其の所有者ならざる他人に依つて評價されたる效用に依つて決定されると爲す説(Say)
- 五、價值は、客觀的資本に關係なき人的勤務より生ずと爲す説(Bastiat)(註七)

然らば Guyot 自身の價值論は如何。自ら定義して言ふ。「價值は、一個人若しくは一集團に依つて所有されたる效用と、他人若しくは他集團の欲望及び購買力との比である」と。(註八) 而して彼は效用と價值との矛盾を解決せんとして、資本の分類を論ずるのである。

Guyot は言ふ。——效用と價值との矛盾を解決せんが爲には、國民經濟に於ける固定資本と流動資本との區別より出發しなければならぬ。此の區別は、Smith に於ては未だ明瞭でない。確然之を

分類したる最初のものは Ch. Menier (註九)並に余である。固定資本とは、生産に由つて其の同一性を變ぜざるが如き效用であり、流動資本とは、其の同一性を變ずるが如き一切の效用を言ふ。換言すれば、前者は變化する事なき效用よりなり、後者は、變化する事に依つてのみ效用より生じ得るのである。(註一〇) 人間労働の生産力は固定資本の技術的完成と共に増進し、原料は生産行程に於てより、少く消耗され、生産物は益々多くなり、生産費の減少に由り一層安價となるのである。即ち流動資本はその價值益々下落し、固定資本(生産用具)の中に附加されて行く。従つて固定資本の價值は益々騰貴するのである。斯くして、Say, Simon, Proudhon の矛盾論に答へて言ふ。——經濟的進歩の基準は、固定資本の絶對的並に相對的價値の増加、流動資本の單位價値の減少、その總體價値の増加に在る。(註一一)即ち Guyot に從へば、斯くして國民經濟に於ける效用と價値とは、決して反對の方向に動くものではないのである。

註

- I Raymond de Waha, Die Nationalökonomie in Frank. eich. S. 98
- II Yves-Guyot, La Science économique. Pré. XI. 3 éd
- III Yves Guyot, op. cit. p. 2
- IV Yves-Guyot, op. cit. Pré. XI
- V Yves-Guyot, op. cit. p. 13
- VI Raynurd de Waha, Die Nationalökonomie in Frankreich. S. 100
- VII Yves-Guyot, La Science économique. p. 98
- VIII Yves-Guyot, op. cit. p. 99
- IX Ch. Menier, Théorie et Application de l'Impôt sur le Capital. 1874
- X Yves-Guyot, La Science économique. p. 68
- XI Yves-Guyot, op. cit. p. 247

四 結 論

Guyot の自ら以て經濟學上の貢獻となす價値論は略、以上の如くである。卑見を以てすれば、Smith 以來益々紛糾を重ね來れる價値論が Guyot に依つて完全に解決せられたりとは考へられなす。Waha も亦言つて居る。「固定資本と流動資本との矛盾を確認したと言ふ彼の要求に關しては、充分眞面目に許容する事は出來なす。Guyot の議論は效用と價値との矛盾を未だ充分に解決し得ないのである。……效用と價値との矛盾は次の場合に於て始めて解決せられる。即ち、使用價値が論ぜられるところに於ては、交換價値が取扱はれる場合に於けるとは、別個の數量、別個の欲望が前提されるが故に、此の矛盾が生ずると言ふ事を確認する場合に、永年の懸案たる使用價値と交換價値との矛盾は充分に解決せられるのである。Guyot は先づ效用の概念をば、彼の價値定義の横はると同一方向に於て定める必要があつた。然うしたならば、此の矛盾は本質上解決されたであらう」と。(註一二) Guyot の價値論は内在的主觀論(註一三)でありながら、然かも彼は、確かに價値の客觀的要素、客觀的基礎として、生産費を認めて居る。(註一四)然かも、彼の效用の概念が既に不明確である。或る時は、欲望充足に對する客觀的適合性と解し、又或る時は、此の適合性の主觀的評價と解して居る。

(註四) 斯くの如き概念の混亂あるのみならず、彼の主觀論其れ自體も誤つて居る。彼は價值を以て、一個人の有する效用と他人の欲望との比率であると見て居るが、二個の效用が交換せらるゝ前に、各人はその效用を各、評價するのである。即ち彼等交換者の間に、異なる二個の評價を基礎とする一致が成立しなければならぬ。然るに Guyot の定義は、二個の效用の此の一致せる評價を表して居ないのである。(註五)

若し夫れ彼の極端なる自由主義に至つては直に首肯し得ざる節多く、彼自身に就ても、社會的地位を別にして學問的に言へば、四面楚歌の慨があつたのである。此の極端なる個人主義は、その師 Molinari に於ても敗戦に終つて居る。Guyot 自身の傳ふるところに由れば、Molinari は最後の著書 *Ultima verba* を出版する數年前、「余は二十數年此の方、保護主義並に社會主義と戦つて來た。が聊か敗戦の憂目を見て居る。此が私をして厭世主義者たらしめる」と彼に語つた由であるが、(註六) 此の境遇は、直に以て Guyot 自身に移して見ることが出来る。然かも彼等は共に自己の學説が唯一の眞理たる事を信じて已まなかつた。(註七) 即ち Guyot は其の所信を述べて曰く「懷疑論者は余に言ふであらう——そうだ、併し汝は社會主義運動も保護主義運動も阻止する事が出来なかつた。汝は孤獨である。余は確然と答へる——燈臺も亦孤獨である。然かも其の燈火はよく危険を避けて正しき航路に就かしめる」と。(註八) 彼の生涯は、斯る、信念と自負とを以て一貫せる自由主義闘士としてのそれであつた。

由來、佛蘭西經濟學者の心底には、心理的・人的なる見解と自然法的樂天觀とが流れて居る。佛蘭

西人は明瞭を貴ぶ所の言語に慣らされて居る結果として、思索に於ても、事理の透徹を貴び、前後脈絡あり首尾一貫せる事を貴ぶ。尤も、明瞭を貴び、首尾一貫を重んずるの精神は、往々にして、人をして物を離れての推理即ち抽象的推論を逞しうして、遂に眞實を遠かるの危険に陥らしむることあるべきは否み難い。(註九) 現に斯る思辯の犠牲者となりし者の例を Guyot に於て發見する。私は Guyot を以て、理論家として見るよりも、斯る佛蘭西人特有の論説を抱懷せる一代表者と見る點に於て特殊の興味を覺ゆるものである。惟ふに、一八一五年 Physiocrate 學派の發生と隆興と其の末運とを具々に睹たる Pierre Samuel du Pont de Nemours の米國亡命が、該學派の最後を意味すると同じく、Guyot の長逝は、極端なる自由主義の終末を語るものではあるまいか。

註

- I Raymond de Waha, Die Nationalökonomie in Frankreich. S. 102
- II Raymond de Waha, op. cit. S. 100
- III Sarányi-Unger, Die Entwicklung der theoretischen Volkswirtschaftslehre. S. 166
- IV Raymond de Waha, op. cit. S. 100
- V Maurice Block, Les Progrès de la Science économique. p. 151
- VI Gaston Pirou, Les Doctrines économiques en France. p. 115
- VII Gaston Pirou, op. cit. p. 115
- VIII Yves-Guyot, La Science économique. Pré. VI
- IX 增井教授「アダム・スミスとその後の佛蘭西經濟學者」三田學會雜誌第十卷第七號